

大学入学資格検定制度と受検者層の変遷

～後期中等教育の拡大・収束の裏側で～

上智大学大学院 河野銀子

はじめに

大学入学資格検定試験（大検）は中学校卒業後、高校（高専）に進学しなかった者や、入学はしたが卒業しなかった者など（定時制・通信課程在学者は受検可）に大学・短大への入学資格を与えるための制度である。この検定は1951年に文部省によって実施され、現在に至っている。ところでここ数年「大検」が注目されている。受検者数の伸びを報じる新聞記事や雑誌、その他の出版物における紹介などによって、よく知られるようになってきた。受検者数の増加現象は1984年頃からみられはじめたが、それは高校生の中退問題がクローズアップされ始める時機でもあった。文部省のアンケートなどにより、「大検」受検者数の増加が中退と無関係ではないことが明らかにされている。また、高校に入学せず直接「大検」を受検し、その後大学等への進学をめざす者もいる。高校中退にしろ不進学にしろ、大学・短大への進学を自明のこととしながらも、「高校」という教育機関を経由しない者が存在することは、高校進学率の収束状態以降の「高校」を考える一つの指標になるのではないだろうか。多少強引な表現をするなら、高校は「拒否」されたのであり、高等教育進学希望者にとっての準備教育機関としては期待されていない、という現象が起こり始めているのである。本研究は大検受検者数の増加が、学校化した社会での「学校的」人間形成空間を拒否する象徴的行為ではないかという問題意識から出発している。

今回の報告では「大検」に重点を置き、最近の受検者の一部が高校を経由せずに高等教育機関へ進学希望をする者たちであることの発見と、そのような形での高校拒否的現象がいつ頃から生じるようになったのかを、大検制度の実施以降の流れを追いながら明らかにする。また、大検受検者と高校教育の距離についても触れておくことにする。

大検制度の変遷

この制度は1951年、「大学入学に関し、高等学校を卒業した者と同等以上の学力があるかどうかを認定すること」を目的として、文部省令第13号「大学入学資格検定規程」によって法的に制度化された。この制度は現行法までに、受検資格、受検科目等において改正が行われてきた。

受検資格は当初「当該資格検定施行の日までに16歳に達する者で、中学を卒業したが高等学校に入学することができなかった者又は高等学校に入学したが家庭の事情、健康状態その他やむを得ない事由により高等学校を卒業することができなかった者」（第2条）とされていた。しかし、1953年、1967年に受検資格について制度の改正があり、受検可能者が拡大した。1953年には、定時制課程在学者と、旧青年学校令、文部・陸軍省令の規程により文部大臣の指定した者に対して受検資格が付与され、中学校卒業者であれば満16歳以上でなくとも受検可能になった。1967年には高等専門学校第3学年までの中途退学者に、受検資格が与えられた。

受検科目の変更の大部分は、高等学校学習指導要領改

訂によるが、受検すべき科目数の削減や選択科目の増加によって、さまざまな課程の高等学校中退者や他の教育機関在学者にとっても受検しやすい制度になった。また、1984年には、大検合格科目を定時制・通信制課程の単位として認めるようになり、大検と両課程高校との相互関係が柔軟になった。

以上に見られるように「大学入学資格検定規程」は、年齢制限の除外や定時制在学者などに受検資格を拡大することによって、また受検科目数を削減し選択科目をあげるといった経緯をたどることで、受検できる者の間口を拡げ、受検を容易にしてきた。これは、大学入学者数の拡大を意図した文部省の意向に沿うものでもある。

尚、1988年の文部省の組織替えにより「大検」の所管は初等中等局から生涯学習局へ移行され、大検は生涯学習体系のなかに位置づけ直された。

受検者数の推移（図1）

受検者数は1951年度から1954年度まで5000～6000人であったが、翌年度より減少し1959年から1971年の間は200人前後で停滞した。しかし、その後毎年増加し、1980年に1万人を越え、1991年には17007人が受検した。出願者中に占める受検者の割合は、1970年頃までは約7割であったのに、1975年には約8割、1990年は約9割弱と上昇しており、出願すればほぼ受検するという傾向が定まっている。これは、受検者層が経済的貧困層による高校不進学者から、大学進学を希望しつつも何等かの理由によって高校に進学しなかった者や高校中退者に変わってきたことの現れであろう。高校に在学せずに大学等へ進学するためには「大検」合格が必須だからである。また、大検受検者数の増加が見かけだけではないことは、高校在学者数の増加率との比較によって明らかである。

大検受検者層の変容

過去の受検者の実態を把握するのは困難であるが、大検を取り上げた雑誌・新聞記事から受検者像をとらえようとした。「大検」志願者が大学等への進学希望者であることから大学受験雑誌である『筑雪時代』を、また社会的立場を知るために一般の人が受け手となる新聞記事の掲載内容を調べた。

・『筑雪時代』

1951年8月号の『筑雪時代』に初めて「大検」の記事が掲載されるが、その内容は「向学心に燃える勤労青年に大学入学への“希望と確信”を与えるための制度」とあると紹介されている。制度の紹介のほかには1950年代には、大検の日程や試験会場、検定試験問題と解説が取り上げられている。しかし1960年代になると、経済的理屈によって大学進学を断念せねばならない境遇の者に、奨学金制度を紹介する記事の中で「大検」も取り扱われるようになる。大検そのものを詳細に掲載することはなくなる。1974年を最後に『筑雪時代』での「大検」記事は掲載されなくなるが、当時の記事は「文部省の大検にパスすると、大学入学資格が得られると聞きました。私は高校中退ですが、ぜひ、大学へ行きたいと思っています。

詳しい内容を教えてください。」という読者からの投書と、それに対する編集者側の簡単な回答であった。

以上のような掲載内容の変化から、制度導入から1960年代までの「大検」受検者層は大学進学を経済的理由から断念せざるを得ない「勤労青年」や「独学青少年」であったと思われる。

・新聞掲載記事

新聞(朝日新聞)掲載記事を見るとその内容から、概ね4つの区分に分けられる。

1. 1951年～1960年頃(掲載回数7回)

「専攻」に代わる「実検」に代わる勤労青年(=独学者)の進学の門として「大検」が説明され、合格は苦勞を背負った者の努力の結晶であった。

2. 1960年代(掲載回数3回)

「高等学校へ進学しなかった者や中途退学者のために設けられた制度」として掲載されるが、大衆に送る価値の低い情報であると判断されていたようだ。

3. 1970年～1985年(掲載回数4回)

最年少あるいは最高齢の合格者をとりあげ「最高記録」として掲載するようになる。高校進学が当然になり、同年齢の大検受検者が減少したことによると思われる。

4. 1985年以降(1990年までの掲載回数16回)

受検者数の増加などにより、合格者談は紹介されず、「大検」が中退者の救済ルートや高校不進学者の戦略的大学進学ルートとして掲載されるようになる。

以上のような掲載記事の変化から、出願者が増加する中で、経済的弱者の救済措置という大検の本来的目的は薄れつつあると言える。

現代における大検受検者にみる「懷疑型」文化

1985年以降「大検」受検者は二極分化したと考えられる。一方は高校から脱落してしまった者、他方は自らの意志で高校に見切りをつけた者である。受検者の約6割が高校とは別の学校に在籍していることが特徴である。中学校卒業後、高校ではなく「大検予備校」へ進学して大学をめざす者や、高校中退後「大検予備校」へ転入して大学をめざす者が現れるのである。このような積極的高校拒否による大検受検者の実態をとらえるために都内の大検予備校でインタビューを実施したが、詳細は発表の際にレジュメを配布し、報告する。

渡部真(「高校生の問題行動についての考察」『犯罪社会学研究』第5号、1980)は、高校との同一視が低い、知性・知識への関心が高い生徒文化を「懷疑型」と名付けている。インタビューの結果から最近の大検受検者の一部に、高校における「懷疑型」生徒文化に近いタイプがみられることがわかった。この文化に含まれる生徒は、高校外の集団や思想に準拠し、高校からの独立をめざす。また、他のタイプの生徒のように高卒という学歴や知識を教育の目的とは考えておらず、アイデンティティ-それ自体の追求を意識し、特に美術・文学・政治などを志向する。大検受検者の一部には「懷疑型」生徒文化に近い文化を所有する者が存在する。高校への不進学や中退そのものが高校との同一視の低さの現れであり、読書経験が豊富であったり勉強好きであることは、知性・知識への関心の高さであると考えられる。

大検受検者と高校教育の距離

大検受検者層は経済的貧困層から社会的弱者へ、向学心に燃える独学者や勤労青少年から自己欲求達成のためにチャレンジする高齢者や障害者へ、そして最近では高校中退者や意図的の高校不進学者へと変容してきた。高校

教育の量的拡大過程の中で、大検は国民の「高卒」という学歴が達成されるのと対照的に量的に縮小したが、高校教育が収束状態になってから「大卒」という学歴取得のためのひとつのルートとして拡大傾向にあると言える。

かつて高校に進学したくても経済的理由などによって実現できなかった青少年達は「大検」によって、向学心を満たせ大学をめざした。日本の経済成長と共に経済的要因による高校不進学は解消され、その意味での大検は必要とされなくなった。しかし、高校が生徒の多様化に対応しきれなくなると、高校教育に不満を持つ大学等への進学希望者が「高校」ではなく「大検」を積極的に選択するようになった。高校が質的満足を与えられない状況では、高校は拒否されることになる。大検を主体的に選択するのは、高校で行われる教育より高い文化をもつ者である。かつての高校を見上げていた「大検」受検者層は不在となり、今や高校を見下ろす受検者層が出現するようになった。ここに「高校」と「大検」受検者層との文化的距離が見出され、しかも上下関係の逆転が生じていることを指摘したい。

(図1) 大検受検状況の推移

